

楯ヶ崎・光岸地区の小高い場所にある祠。住民を救った守り神には手を付けないプランを立てた



復興の現場 3

岩手県  
宮古市  
MIYAKO

# 住民の思いを大切にしながら 一刻も早い復興を目指す

震災直後から復興への協力を志願した湊貴世は2012年10月、岩手県宮古市の復興支援事務所に赴任した。まちの再生を信じて、住民に寄り添った復興を目指し多忙な日々を送っている。

★以外の写真Ⅱ井上健 取材・文Ⅱ横田直子



岩手県宮古市の海岸線中央部にある楯ヶ崎・光岸地区。多くの住宅が津波によって流されてしまった。その外れの小高い場所に小さな祠が残っている。

「この祠の底に登って津波から逃れた方がいらしたんです。なので、復興計画ではこの祠に手を付けず、そのまま残すように境界を決めました」。祠のすぐ下にある境界を示す赤い杭を示して、UR都市機構宮古復興支援事務所の湊貴世は説明する。

「住民を守ってくれた祠は、地元にとって大切な存在です。それがないがしろにしてはまちの復興にはなりません。復興で何より大事なのは、住んでいる人の思いを大切にすることだと考えています」と湊は話した。

## 「まちは壊滅しない」

3年間、仙台市内に赴任していた経験を持つ湊。震災当日は大阪で勤務していたが、東北地方が大きな被害を受けたと分かると、テレビの前から離れられなくなった。知っている地名が次々に画面に流れ、その無残な光景が映し出



## ● 宮古市の震災被害状況

津波による浸水状況	面積 ……………	10km <sup>2</sup>
	建物用地の浸水率 ……	22%
人的被害	死者 ……………	456人
	行方不明 ……………	94人
住宅家屋被害	全壊 ……………	2677棟
	半壊 ……………	1328棟

※浸水のデータ:国土地理院、人的・住宅被害のデータ:消防庁災害対策本部  
2013年3月末時点



田老(たろう)地区のX字型に組み合わされ2重に設けられた防潮堤。今回の津波はその防潮堤をも乗り越えた

★

## ● UR都市機構の復興まちづくり支援

	地区名	面積
復興市街地整備	田老	44ha
	鯨ヶ崎・光岸地	24ha

※面積は事業計画等の面積を表す(小数点以下四捨五入)

2013年5月15日時点

湊は、震災直後から復興支援を志願して、2012年10月に宮古市に赴任した

された。東北には多くの知人が住んでいる。その安否が気に掛かった。もちろん、湊はUR都市機構がこれまで震災復興に関わってきたことを知っていた。「今回、URが震災復興に携わる時には、自分もぜひ関わりたい。多くの経験を積んでいるわけではないので自信はない。それでも自分にも何かできることがきっとあるはずだ。」

そして、長く伸ばしていた髪を短く切り、週明けにはその思いを上司に申し出た。いてもたってもいられなかった。

震災直後の異動は実現しなかったが、自分の目で現地を見ておきたかった湊は、ボランティアで岩手県大槌町と陸前高田市を訪れた。

報道で繰り返し使われる「まちが壊滅状態」というフレーズ。それを聞くと、湊は強い憤りを感じた。道路や建物が壊れても、人の生活やつながりや時間や思いがある。人がいる限りまちは壊れないと考えていたからだ。

しかし、実際の被災地は既になれが片付けられ、まちがあったことが想像できないくらい何もな

かった。人の気配も生活の匂いもほとんどない。「壊滅」という言葉が否定できませんでした」(湊)。

復興という言葉を使うことに対する自らの認識の甘さを痛感したのだ。

ただ、足元には土の中に食器や子どものおもちゃといった以前の生活をしのばせる断片が見つかる。「やはりここには生活があったんだ。いま姿は見えないけど、ここを思う人はいるはずだ。また必ずまちになるはずだと、気持ちを奮い立たせたのを覚えています」。

湊が宮古事務所へ赴任の打診を受けたのは、一年半後。住まいの環境などが整わない現地の状況を心配した上司から、「一晩よく考えてみる」とアドバイスを受けた。しかし迷いはなかった。その日のうちに「行きます」と答えていた。

### 全力でやるのみ

上司の言葉通り、赴任当初は宿舍が盛岡市内にしか確保できず、宮古市内のホテルを転々とした。週末に約100kmの道のりを2時間近くかけて宿舍に戻り、洗濯

“万里の長城”と呼ばれた田老の防潮堤の上で宮古市の花坂主任技師と計画を詰めていく



## 大きなショックを受けた住民が安心できる復興を実現



宮古市  
都市整備部都市計画課  
計画担当  
花坂真吾 主任技師

宮古市がUR都市機構に復興市街地整備を委託した田老地区は、非常に防災意識の高い地域でした。“万里の長城”と呼ばれた長大な防潮堤を莫大な予算を投じて建設していました。しかし、今回の震災ではそれを越えて津波に襲われ、大きな被害がでたことから、住民はほかの地域よりもさらに大きなショックを受けました。そのショックを癒やし、乗り越えることができる安心なまちづくりをUR都市機構の支援を受け全力で進めています。



土地区画整理事業などの事業計画策定のため膨大な書類作成業務に取り組む。時には深夜まで事務作業が続く

をすませ、1週間分の着替えを持ち、宮古市に赴く日もあった。

しかし湊はこうした状況も当然だと考えていた。「住民の方が仮設住宅で苦勞されている状態を思えば、大変などとは全く思いません」。

現在湊は、昼間に境界確定の立ち会いといった現場作業を行っている。2月には4日をかけて約60人の住民の方と雪山での測量を行ったことがあった。関西出身の湊にとつて、慣れない土地で慣れない方言を聞きながらの作業。会話の内容が分からず、相づちでさえ間違えることもあった。そんな中、境界線を巡ってもめることもある。もっと事業を早く進めてくれと言われることもある。しかし、「こうした住民の方の声を聞くことが私たちには大切だと思っっています。しっかりと受け止めて、喜んでもらえるまちに戻したいです」と湊は話す。

そして夜間は、膨大な書類作成作業だ。一言一句、数字一つ間違えることができない書類の締め切りが次々に到来する。「深夜まで作業に追われて、徹夜になるこ

ともたびたびです」。

さらに湊は「慣れない業務も多し中、先輩職員にアドバイスももらいながら、専門書を片手に必死に取り組んでいます。沿岸部の事務所間でSOSの電話をかけ、助け合うこともあります。みんなのチームワークで乗り切っています」と続けた。

一般的に区画整理などによるまちづくりは10年単位で考える長期にわたる事業。しかし、今回は少しでも早く工事を始めて、住民の方に復興が進んでいることを、実感してもらわなくてはならない。

時間がたつにつれ、住民たちは以前暮らしてきたまちに戻ることを諦め、新しいまちで生活を続けることを選ぶ可能性が高くなる。いかにスピーディーに事業を進めるかが湊らの大きな課題だ。

夏前には、いよいよ事業地区内に重機が入り、工事が始まる。震災から3年目、ようやく住民に復興へと進む動きを目で見えてもらえる日が来る。「とにかく、全力でやるのみです」。湊は力強く言い切った。